『彼らの敵』

瀬戸山美咲

【登場人物】　※坂本役以外の俳優は複数の役を演じる。

坂本
後藤　警備員、カメラマン３
飯倉　相澤、お調子者の男、車の男、沢渡、電話の男、ウエイター
狭川　田中眞紀子、強盗団の男、船頭、友人、カメラマン１、パパラッチ１
川瀬　矢田、成田空港の記者、手紙の女
男　ボス、杉村、ＳＰ、カメラマン２、パパラッチ２

黒い空間。
センター床面に月のような白い円。
上手に砂、テント、カヌーのオール、木箱など。
下手にテーブル、椅子５脚、カメラ用品、ノートパソコン、ラックなど。

坂本、円の真ん中にしゃがみ込んでカメラを構えている。
坂本を取り囲むように立つ５人の男女。
坂本の背後に川瀬が立つ。
長い沈黙。坂本、シャッターを切る。

川瀬　その日、彼はとある宗教団体のとある建物を撮るために、とあるＪＲのとある駅に降り立った。

駅。発車メロディー。
満員電車から降りようとしている坂本。
乗り込む人々が押し寄せて来る。

坂本　降ります！

四方に散っていく人々。
川瀬はテーブルでノートパソコンを開く。
街の雑踏。
ある建物の前。坂本、カメラを構える。
警備員がやってくる。

警備員　はい、ちょっと、すみません。
坂本　ん？
警備員　ここでの撮影はご遠慮いただいています。
坂本　ああ、はい。

坂本、カメラを下ろす。
警備員、見ている。
坂本が去ろうとするを確認して、警備員も去ろうとする。
と、坂本、素早くカメラを出し、シャッターを押す。

警備員　ちょ！　許可は得てるんですか。
坂本　あ、はい。
警備員　得てるんですか。
坂本　はい。いえ。
警備員　許可のない撮影はご遠慮いただいています。
坂本　いや、だから、景色を。
警備員　は？
坂本　景色を撮りたくて。
警備員　いやいやいや。おかしいでしょう。
坂本　はい？
警備員　おかしいでしょう。景色ですか。建物撮ってるでしょう。
坂本　建物も景色……。
警備員　どこですか。
坂本　はい？
警備員　どこの出版社？
坂本　え？
警備員　出版社でしょう。
坂本　違います。
警備員　お名刺。お名刺ください。
坂本　はい？
警備員　……とにかく、やめてください。
坂本　……。
警備員　いいですね。
坂本　はい。

警備員、去る。
坂本、姿を消すが、再び走り込んで来てシャッターを押す。
警備員、走って来る。

警備員　ちょ！　あんた！
坂本　（カメラをしまう）え？

警備員　撮ったでしょ。
坂本　（首を振る）
警備員　出して。
坂本　うん？
警備員　フィルム。出して。
坂本　なんで。趣味で。
警備員　趣味じゃないです。仕事でしょ。
坂本　景色を。
警備員　景色じゃないです。建物でしょ。
坂本　（頷いて）うんうん。
警備員　頼みますよ。
坂本　うんうん。（ダッシュで去る）
警備員　ちょ！　あんた！

編集部になる。

カメラマンたち　田中眞紀子のセクシーショット？

飯倉を囲んで集まるカメラマンたち。
坂本、駆け込んで来る。

坂本　すみません！　遅くなりました！

カメラマンたち、坂本を見る。

坂本　どうしたんですか。
カメラマン１　飯倉さんが田中眞紀子のセクシーショット撮れって。
飯倉　文句あんのか。
カメラマン１　いえ。
飯倉　眞紀子は来週、新潟に帰る。その里帰りに密着する。
カメラマン３　それグラビア班総出でやることですか。
飯倉　馬鹿か。今、眞紀子は絶対なんだよ。
カメラマン２　セクシーショットってなんなんすか。
飯倉　セクシーショットはセクシーショットだろうが！　いいか！　グッとくる眞紀子を撮るんだよ！

シャッター音。
田中眞紀子を追うカメラマンたち。

演説をしている田中眞紀子を下から狙う。
地面に這いつくばっていた坂本、ＳＰに捕まる。

ＳＰ　ちょっとおかしくないですか！
坂本　はい？
ＳＰ　先生の取材ですよね！
坂本　は、はい！
ＳＰ　なんで下から撮るんですか！
坂本　たまたまです！
ＳＰ　あんまり変なことするようでしたらしかるべき処置をとりますよ。

坂本、力尽きて地面に倒れ込む。

川瀬　結局、彼のフィルムには残念ながら田中眞紀子のパンチラは写っていなかった。
坂本　（這いつくばったまま）ブラチラは撮れたんです！
川瀬　結局、ただの密着レポートとして誌面には載った。
坂本　ブラチラは撮れたんです！

飯倉、やってくる。

坂本　（飯倉に写真を見せて）ほら！　これ！　ブラの肩ひもですよね！　ですよね！
飯倉　（写真を捨てる）
坂本　くっそ……！

飯倉、坂本の隣に座る。
車の中になる。深夜。
シートを倒して横になる飯倉。

坂本　飯倉さん、寝るんすか！
飯倉　寝てねえんだよ！
坂本　ちょっと！　いつ出てくるかわかんないんすよ！　気ぃ抜かないでくださいよ！
飯倉　坂本ちゃん。撮っといて。
坂本　撮っときますよ！　撮っときますけど！　ちょ！　寝ないで下さい！
飯倉　うるせえな！
坂本　なんかしゃべっててくださいよ。そうじゃないと俺も寝そうなんすよ！
飯倉　寝んなよ！　ふざけんな！

坂本　なんなんすか！
飯倉　２０時間だぞ！　２０時間張り込んで撮れなかったとかないからな！
坂本　じゃ、飯倉さんも寝ないでくださいよ！　だいたいあんた今来たばっかりでしょ！
飯倉　だから、校了明けで寝てねえんだよ！
坂本　じゃあ、向こうの車で寝て下さい。田辺の車、向こういますから。
飯倉　うるせえな。「めざまし巨乳女子アナ、三浦カズの後輩Ｊリーガーと深夜のハットトリック、Ｖゴールは麻布のホテルで」。キスくらい撮れよ！
坂本　そんなこと言われても、するとは限らないじゃないっすか。
飯倉　おめえがさせんだよ！　カメラマンだろ！
坂本　むちゃくちゃ言わないでくださいよ！
飯倉　（封筒を見つけて）お、これ何だ。眞紀子？
坂本　（血相を変えて封筒を奪い取り）これはダメです！
飯倉　はあ？　見せろよ。
坂本　ダメです。
飯倉　え、なんで？
坂本　ダメです。
飯倉　なんだよ。つまんねえな！　（車のドアを開ける）
坂本　どこ行くんすか！
飯倉　田辺の車で寝る。

飯倉、出て行く。
坂本、かばんから黒い布を取り出す。
布をかぶってファインダーを覗く。
木々を揺らす風の音が聞こえて来る。
森の中。
男がやってくる。
坂本の隣に座る。

男　The moon is beautiful.
坂本　Yes.
男　You look sad.
坂本　No.
男　Smile. Make yourself happy.
坂本　はい。
男　How, s your friend?

坂本　Friend... He has a stomachache. Because he ate the dangerous smells cheese.
男　Oh...He ate it too.
坂本　Yes.I ate it too.
男　Don｡t worry. You｡ll not die.
坂本　Not die... 死なない……。

（ハーモニカの音が聞こえる。）

男　What are you thinking?
坂本　...About my grandmother...おばあちゃん。
男　Your grandmother?
坂本　Yes. But she already died.
男　Then why do you remember your grandmother?
坂本　I don｡t know. But I...
男　（ポケットから写真を出して）Look.
坂本　ん？
男　My daughter.
坂本　Daughter? Cute.
男　She is innocent. She only knows truth, goodness, and beauty.
坂本　Yes.
男　（立ち上がる）Have a good sleep.
坂本　Sleep? Yes.
男　I tell you some words to help you.
坂本　Help me? 言葉？
男　アサンケアザードカヨ。
坂本　アサンケアザードカヨ。
男　Good.
坂本　アサンケ……来た！

（坂本、シャッターを切る。
フラッシュがたかれる。
成田空港。記者会見。）

記者　日本中に迷惑をかけたことについて、どうお考えですか！

（坂本、後藤、相澤、報道陣に囲まれている。）

坂本　いろいろな方にご迷惑をかけたことを反省すると同時に感謝しています。
相澤　冷静に振り返って十分に反省し、今後に繋げていきたいと思います。
後藤　すみませんでした。
記者　なぜ、このような無計画な冒険をしたんですか。
坂本　無計画ではありません。半年前からずっと準備していました。夢に見るくらい楽しみで……。僕たちの気持ちも理解していただけると嬉しいです。
記者　湾岸戦争が起きている今、危機意識が欠如していたと言えませんか。
坂本　僕たちのおこなった軽率な行動でたくさんの方にご迷惑をおかけいたしました。たいへん申し訳ありませんでした。

狭川が週刊文春を握りしめて登場。

狭川　私は見た！　早大生三人の甘えと無知。インダス川をカヌーで下るという冒険に挑んだ早稲田の学生三人が武装集団に誘拐された。現場は地元の人間さえ近づかない危険極まりない地域。なぜそんなところへ踏み込んでしまったのか。同宿した女性ルポライターの証言が学生たちの無知と甘えを明らかにする。

狭川と電話している矢田。

矢田　パキスタンの出稼ぎ労働者の取材でイスラマバードに滞在している時、たまたま彼らと一緒の民宿に泊まったんです。そこで、彼らの様子を目にしたんですが、これが何とも心もとない。この人たちに川下りなんて本当にできるのかしらと、帰国してからも気になっていました。
狭川　カヌーによるインダス川下りに挑戦していた早稲田大学のフロンティアボートクラブの学生三人が「ダコイト」と呼ばれる武装犯罪集団に誘拐された事件は、政情不安定な国を旅する怖さを再認識させた。誘拐されたのは早大政経学部三年の相澤紀行君、教育学部二年の坂本博康君、同二年の後藤正実君の３人。このうち、相澤君は先月下旬に解放され、在イスラマバードの日本大使館員とともに、犯人グループとの交渉にあたっている。
矢田　彼らと同宿していたのは、２月１３日から５日間。宿は日本人女性が経営する民宿です。彼らの第一印象は、現代の若者らしい好青年だなあというもの。何回か雑談をしたんですが、みんなおとなしくて、少々子どもっぽいところがありました。
坂本　僕は、この女性に会っていない。
矢田　女主人には１３歳になる息子さんがいます。みんなボンちゃんと呼んでいました。ボンちゃんは彼らの計画を聞いた途端、血相を変えて、

狭川　「それはあかん。一人か二人は殺されるで」
矢田　と強い口調で言いました。
狭川　「その流域はピストルを持っている人が多いから、カヌーは恰好の標的になってしまう」
矢田　とカヌーでインダス川を下るのがいかに危険か必死で説得し始めたんです。
狭川　インダス川の下流にあるシンド州の流域は、１０年くらい前までは非常に平和だった。しかし、アフガン戦争が勃発したあたりから、この一帯がアフガンゲリラへの武器供給ルートとなり、「ダコイト」と呼ばれる犯罪集団が豊富な武器と資金をバックに暗躍するようになった。ダコイトたちは今回のような誘拐を一種のビジネスとしておこなっているんです。
矢田　さらに彼らは現地のルールさえ知りませんでした。インダス川では橋ごとに、観光省でもらった許可証を提示しなければならないんです。
坂本　僕は、この女性に会っていない。
矢田　彼らは鮮やかな発色カラーのダウン・ジャケットに発色カラーの腕時計。まるで、西武スポーツ館で一式そろえてきましたといわんばかりでした。
坂本　僕は、会っていない。
矢田　私は彼らを止められなかった。
坂本　僕は、あなたに会っていない。
狭川　パキスタンの観光省は渋々上流５０キロ区間の許可証を与えた。しかし、彼らはそれを８００キロもオーバーしたところで誘拐された。

狭川、坂本と後藤にオールを渡す。
川の音。太陽がじりじりと照りつけている。
坂本、後藤、カヌーをこいでいる。

坂本　あー腹減った。
後藤　もうちょっとで飯にしよう。
坂本　おう。
後藤　そろそろ水も調達しないとな。次の村あたりで。
坂本　その必要はない。
後藤　いやいや。
坂本　うまいよ。
後藤　うん、何が？
坂本　川の水。
後藤　おまえ、飲んだのかよ。
坂本　いけるよ。
後藤　わー。おまえそういうとこあるよな。

坂本　コップですくうとミルクティーみたいな色なんだよ。
後藤　それだめなやつだろ。
坂本　すぐ砂が下に沈んで透明になるんだよ。冷たくて、うまい。だまされたと思って飲んでみ。
後藤　飲んでみって、俺、腹弱いんだよ。
坂本　大丈夫大丈夫。ちょっと今、飲んでみ。
後藤　やだやだやだ。

パーンという銃声。

坂本　何の音。
後藤　ん？
坂本　何か音しないか。
後藤　銃声――。

キューンと銃弾が風を切る音。

坂本　なんか、近くない？
後藤　ハンター？
坂本　いや、違う。

銃声、近くなってくる。

坂本　俺たち狙ってる！
後藤　え！
坂本　逃げるぞ！　早くこげ！
後藤　待って！　相澤さんは！
坂本　え！　相澤さん！

振り返ると、相澤が両手を上げている。
川瀬、ノートパソコンから顔を上げて、坂本を見ている。

川瀬　後ろについて来ていた相澤さんはそのときすでに両手を上げていた。賢明な判断だ。銃弾を撃った男たちは彼らにカヌーから降りるよう指示した。そしてビニールシートを広げて、彼らの荷物をチェックした。やがてボスがやってきた。

ボスが来る。

川瀬　ボスは「君たちを僕らの家に招待したい」と言った。殺される――と、彼は瞬間的に思った。彼らはボスに連れられて川沿いを歩き始めた。連れて行かれた先は、森の中だった。

坂本たち、森の中に座らされる。

川瀬　インダス川では、乾期になると川の水が少なくなり、地図にはない土地が現れる。そこに木が生える。木は生い茂り、小さな森を作る。森の中に、上からは見えないよう、木を伐採して切り開かれた場所があった。土の上には１０人ほど座っていた。とらわれた人たちだった。

強盗団たち話し合っている。

川瀬　強盗団の目的は純粋に金だった。身代金を払えば解放するとボスは言った。しかし、そう言いながら強盗団も戸惑っているようだった。パキスタン人を誘拐したら、家族や会社に身代金を要求する。しかし、外国人の身代金はどこに要求すればいいのか。彼らの出した結論は、「国」だった。日本という国に身代金を要求する。誘拐から一週間後、強盗団は３人のうちひとりをメッセンジャーとして解放することを認めた。翌日、相澤さんがイスラマバードの日本大使館を目指し、アジトを出発した。

相澤、アジトをあとにする。

後藤　ああー！　もうダメだ。
坂本　ダメとか言うなよ。
後藤　だって、もう何日経ったんだよ。相澤さんが行ってから。
坂本　一週間。
後藤　何かあったのかな。
坂本　何かって。
後藤　デスメッセンジャー。
坂本　やめろよ。
後藤　今頃、相澤さんは殺されて、道ばたに捨てられてるんだ。さあ、身代金を支払わないと残りふたりもこうなるぞ。
坂本　やめろよ。
後藤　でも、そういう恐れがあるから相澤さんが行ってくれたんだろ。
坂本　そうだけど……。

後藤　ここからイスラマバードまでどんなにかかっても2日くらいだろ。それからお金を用意したとして、3日とか4日だろ。もう何か動きがあってもいいだろ。
坂本　後藤、忘れるな。ここはパキスタンだ。そして、俺たちは今誘拐されている。普通の感覚でものを考えるな。
後藤　じゃあ、どんな感覚で考えればいいんだよ！　もうだめだ……相澤さんは殺されたんだ。そして、俺たちも殺されるんだ！
坂本　後藤！

取り乱す後藤を抑える坂本。
イスラムの祈りの声が聞こえて来る。
顔を上げる二人。

後藤　頭がおかしくなりそうなんだ。
坂本　うん。
後藤　最近、夜中に目が覚めるのが怖いんだ。変なことばっか考えちゃうから。
坂本　うん。
後藤　もしも、ここで誰にも気づかれないで死んだら……。
坂本　うん……。
後藤　俺たちの人生って何だったんだ。
坂本　うん。
後藤　坂本は、将来、何になりたかった？
坂本　過去形やめろよ。
後藤　ごめん。何になりたい？
坂本　後藤は。
後藤　マスコミ、かな。
坂本　もう無理だろ。こんなこと起こして普通に就職なんて無理だ。
後藤　……うん。そうだね。
坂本　俺は冒険の人になりたかった。
後藤　冒険の人。
坂本　なんか、こうやって世界中のいろんなところ行って、ルポ書いたり、写真とか映像撮ったり、そういうことする人。冒険の人。川下りの人。ＯＢの春山さんいるじゃん。
後藤　うん。
坂本　部室にあった写真見た？　春山さんがドイツから送って来た、ベルリンの壁の。
後藤　見た！

坂本　テレビで、やってるのと同じだ！　そういうとこに行けるんだって。春山さん、そこにいたんだって。そんで、こんな写真が撮れるんだって。そういうことやっていいんだって。

後藤　うん。

坂本　できるんだよ。そういうことが。で、そういうことを仕事にするんだ。

後藤　うん。

坂本　そう思ってた。

後藤　うん……。

坂本　思ってた。

後藤　なあ、今、何食べたい。

坂本　え？

後藤　もう、カレーうんざりだろ。

坂本　うん。

後藤　毎日毎日、カレーカレーカレーカレー。今日はうまかったけど……。

坂本　ヤギ。

後藤　泣いてたな。

坂本　めええええってな。

後藤　木に首がひっかけてあった……。あれは俺たちだ。

坂本　後藤。

後藤　めええええ。

坂本　やめろよ。松屋！

後藤　は？

坂本　今食べたいもの。松屋の牛丼。

後藤　おおー！

坂本　ああー！　すげえ、食いてー！

後藤　俺、ケンタッキー。

坂本　おー、やべー！　食いてー！　うおー！

後藤　坂本。

坂本　ん。

後藤　生きて帰ろうな。

坂本　（後藤を見る）

セスナの飛ぶ音。

演歌のＢＧＭ。

早朝。

立ち食いそば屋。

飯倉がそばを持って来る。

飯倉　（坂本にそばを渡して）お疲れ。
坂本　どうも。
飯倉　出て来たらしいよ。２５時間目。
坂本　え？
飯倉　本田さんが撮ったって。
坂本　え、本田さんに代わってまだ３０分。
飯倉　キスも撮れた。朝からねっとりべちょべちょ。
坂本　はあ。
飯倉　さすがだよな。ベテランは違うよ。
坂本　……。
飯倉　坂本ちゃんはいい仕事したよ。
坂本　はあ？
飯倉　ここぞというときに本田さんにバトン渡して撮らせた。新人カメラマンの鑑だ。
坂本　はあ。
飯倉　次、ＮＨＫの善利裕子行くから。とりあえず、家割り出しといて。

飯倉の電話が鳴る。
飯倉、席を外す。
坂本、そばをかきこむ。
飯倉、戻って来る。

飯倉　行って下さい。――行って下さい。お願いします。（電話を切る）
坂本　……。
飯倉　さかもっちゃん、例のセックス教団あるじゃん。
坂本　はあ。
飯倉　潜入させんなら女だなって思って、川瀬ってライターに行かせたんだけどさ。
坂本　へえ。
飯倉　そいつが泣いて嫌がるのよ。「私、取材行けません」って。
坂本　いや、でも、セックス教団ですよね。
飯倉　セックス教団だから女に行かせてんだよ！　教祖が直々に性の儀式ほどこすんだぞ。男が行っても意味ねえだろ。
坂本　で、どうしたんですか。
飯倉　行かせたよ。
坂本　え？
飯倉　行かせんに決まってんだろ。「指定された白装束も買って行く気満々だったんですけど」とか甘えたこと抜かすから、「じゃあ、行きましょう」って。

坂本　はあ。

飯倉、坂本を見ている。

飯倉　坂本ちゃんってさ、パキスタンで誘拐されたんでしょ。
坂本　え？
飯倉　おかま掘られた？
坂本　は？
飯倉　何日間だっけ。
坂本　４４日間です。
飯倉　男だけでしょ。
坂本　そうですけど、でも、売春婦みたいな人も来てましたし。
飯倉　へえ。
坂本　いろんな人来るんですよ。床屋とか。
飯倉　ふうん。
坂本　村の産業なんすよ。誘拐が。日本人だーって、いろんな人が俺たちのこと見物に来てたし。
飯倉　ほお。
坂本　だから、逃げるのはあきらめたんです。どっかの村に逃げ込んだって、そいつらもグルかもしれないんで。
飯倉　誘拐されてる間って、何してんの。
坂本　何もないっすよ。メシ食う以外。
飯倉　メシは出るのね。
坂本　全部豆のカレーっすけど、たまーに、地平線の向こうからヤギ連れたおっちゃんが来るんですよ。そしたらその日はヤギのカレーなんです。これがうまくて。最後のほうは、ヤギ見ただけで、つば出てました。
飯倉　へえ。
坂本　メシ食う以外は、トランプしたり、歌、歌ったり。
飯倉　ほのぼのしてんだな。
坂本　ほのぼの？
飯倉　違うの？
坂本　いや、そうかもしれません。日本に帰って来てからのほうが大変でしたから。
飯倉　覚えてるよ。あれだ。文春にやられたんだ。うちは出遅れたんだよ。
坂本　ははは。そうだったんですか。
飯倉　ねえ、坂本ちゃんってなんでうちのカメラマンやってるの？
坂本　え？
飯倉　なんで？

坂本　いや、えっと……。
飯倉　ま、いっか。ほんじゃ、善利の家、頼むよ。

飯倉、出て行く。
風の音。
森の中。
男がやってくる。

男　Hi.
坂本　Hi.
男　You don't sleep?
坂本　Yes. I can't sleep.
男　Oh...
坂本　あなたは？ How about you?
男　They took me to drink. So, I escaped.
坂本　Drink? アルコール？
男　We never drink. They are crazy.
坂本　ああ。
男　How many days did you spend here?
坂本　何日間。ここ？ 3月17日...From March 17th. Today, 24 days.
男　Oh...
坂本　How about you?
男　Almost 1 month.
坂本　1ヶ月……。 Very very long...
男　Smile. Make yourself happy.
坂本　……。
男　In shaa-Allah.
坂本　インシャラー？
男　If God wishes it.
坂本　もし神が望むなら……インシャラー？ I have nothing to believe.
男　What do you mean?
坂本　え、意味……？ I have no God.
男　（ひどく驚く）No God?
坂本　いやいやいや。I have. I have. But my God is different from your God.
男　God is God.
坂本　Yes, yes, yes. But for example, あなたたちは、もし、明日殺されるかもしれないときでも、神に祈ることができる。OK?

男　No.

坂本　OK, Lets English. If you will be killed tomorrow, you can pray to God. でも、僕にできることはただ、おばあちゃんに祈ることくらい。（手を組んで）おばあちゃん－・おばあちゃん－・おばあちゃん－・ I can only pray to my grandmother, grandmother, grandmother...

男　Your grandmother...

坂本　……あ。What is the meaning of アサハケアザードカミ・Words for God?

男　No.

坂本　No?

男　“ Let me free.„

坂本　Let me free...私を解放してください。

男　The most necessary words for you.

坂本　Yes. Yes. アサハケアザードカミ……アサハケアザードカミ。

男　No, no, no...You don､t say it to Dacoit.

坂本　ダコイトに言っちゃだめ・

男　You should say it to some guests across the river.

坂本　お客さん・三越えて来る人たちに言う－・あー来る－・ 来る－・ 来る－・ いっぱい。例えば、あれ……ヤギ－・ ヤギ－・ ヤギの人－・ヤギ連れてくる。えっ、メヒー－・ メヒー－・ メヒーマハ。The man が連れたメヒー。メヒー。

男　（雪を見に対して）Good.

坂本　え、Good?

男　（ハーモニカを取り出して坂本に渡す）I give this for you.

坂本　ハーモニカ・

男　It､s in my pocket. I bought it for my daughter.

坂本　For daughter?

男　Yes.　For her birthday.

坂本　……もらえない。No thank you.

男　It､s for you.

坂本　Thank you.

男　No problem. I､ll buy another one. I､m a rich man.

坂本　Richman?

男　It､s a joke.

坂本　仕事……。What is your job?

男　I､m in the army.

坂本　Army...

男　I､m in a Pakistan army.

坂本　アーッ！……。

後藤が来る。

後藤　坂本。

坂本　後藤。

男　Are you all right?

坂本　（ハーモニカを見せて）もらった。後藤ちょっとメエーって言ってみ。

後藤　メエー。

男　Good. Smile. Make yourself happy.

男、去る。

坂本　どうした。

後藤　ああ。移動だって。

坂本　え？

後藤　今朝、飛行機の音、聞こえただろ。

坂本　うん。

後藤　軍の偵察らしい。

坂本　え。

後藤　とにかく船に乗れって。

船に乗る坂本と後藤。
船頭が船を漕ぎ始める。

後藤　今度こそだめだ。

坂本　後藤。

後藤　軍が突入してきたら、人質を殺してから戦うってボスが言ってた。

坂本　後藤、

後藤　今日何日だよ。

坂本　４月１０日。

後藤　大学始まった。

坂本　大丈夫だ。相澤さんは大使館に着いている。今に俺たちは解放される。

後藤　うん……。

坂本　後藤！

後藤　俺、童貞で死にたくない。

坂本　なんだよ。じゃあ、あの女にお願いすればよかっただろ。

後藤　やだよ。こわいよ。

坂本　でも、男よりはマシだ。
後藤　おまえ、やられたのか。
坂本　小便行くとき、見張りについて来る下っ端のオヤジいるじゃん。あいつ、俺のズボンに手突っ込んで来た。
後藤　うわあ。
坂本　最初はさ、俺が本当にしたか確かめてるのかと思ったんだけど。
後藤　なんで、確かめるんだよ。
坂本　わかんねーけど、そうなのかなって思ったんだよ。そしたら、そいつ鼻息荒いんだよ。
後藤　げー。
坂本　やめろ！　ってバーンって押したらさ、そいつ、何してきたと思う。
後藤　何。
坂本　銃向けてきた。
後藤　うわ……。
坂本　とっさにわーって考えたよね。ボスならともかく、この下っ端のオヤジにやられるのはいやだって。
後藤　うん。うん？　で、どうしたんだよ。
坂本　走って逃げた。
後藤　なんだよ！
坂本　撃たないって思ったんだよ。あいつだって、そんなことで俺たちのこと殺したらボスに何されるかわかんないだろ。

船から降りて、船頭に連れて行かれる坂本と後藤。

川瀬　こうして彼らは新しいアジトに連れていかれた。そこも森の中だった。それからしばらく、何も動きがなかった。そんなある日、ひとりの男がとらえられてきた。

お調子者の男が強盗団に連れて来られる。

川瀬　男は精悍な顔つきだったが、とにかくヘラヘラ調子のよいことばかりを言っていた。

お調子者の男、ボスに話しかける。

川瀬　自分を仲間にしてくれ。男はどうやらそう言っているようだった。ボスは男にうつぶせになれと命令した。ボスは部下たちを呼んだ。

部下の男たちがやってきて、お調子者の男を取り囲む。

川瀬　部下たちは銃やカヌーのオールで男を殴った、殴った、殴った。

お調子者の男、動かなくなる。

部下の男たち、去る。

お調子者の男、よろよろと起き上がり、逃げようとする。

ボス、銃をお調子者の男に向ける。

身構えるお調子者の男。

ボス、銃を空に向けると、撃つ。

ボス、去る。

お調子者の男の前に、坂本立つ。

男、坂本を睨みつけ、去る。

川瀬　それから、男は強盗団の仲間になった。

後藤、やってくる。

後藤　坂本。ボスが呼んでいる。

坂本と後藤、ボスの前へ。

川瀬　ある日、ボスは、ふたりに尋ねた。「お前たち、帰りたいか」。これで何度目だろうか。毎回彼らは期待した。しかし期待は常に裏切られていた。それでも、ふたりは、今日も、

坂本・後藤　帰りたい。

川瀬　と答えた。すると、ボスは「そうか、今日お前たちを返してやる」と言った。そして、ふたりに１００００ルピーを手渡した。「これでコーラでも飲め」ボスはそう言った。彼らにはボスの話す言葉はなにひとつわからないかったが、そのときボスの言っていることはわかった。それが４４日間という時間だった。

坂本と後藤、船に乗せられる。

川瀬　夜の闇の中、ふたりを載せた船は上流を目指して出発した。彼らはまだ実感が持てなかった。本当に解放されるのだろうか。

船頭が、ちょっと待てという動作をする。

不安な顔をする坂本と後藤。
船頭、水の中の網を引く。魚が釣れる。

川瀬　男は、川に仕掛けた罠を見て、なまずがかかっていると喜んだ。彼らは、
坂本・後藤　なぜ今？
川瀬　と思ったが、何も言えない。そして、再び動き出した船は船着き場に到着した。ふたりは船を降りると、船頭の男に連れられ、歩き出した。あたりはただ夜の闇が広がっていた。しばらく歩くと土手に辿り着いた。土手に上ったふたりは息をのんだ。

大きな月があらわれる。

川瀬　そこには一面、麦畑が広がっていた。月の光を受けて、稲穂がキラキラと輝いていた。ふたりはその黄金の海をかき分けるように前に進んだ。麦畑の向こうに、街灯のあかりが見えた。それは幹線道路だった。４４日ぶりに見た人工のあかりだった。道の上にはパジェロが止まっていた。船頭の男は車の男と話をした。そして、ふたりは車に乗せられた。それは、警察の車だった。

車の男に促され、車に乗るふたり。

川瀬　結局、どこまでが強盗団でどこから警察だったのか、わからなかった。こうして、彼らはパキスタン南部の都市・カラチに連れて行かれた。川下りの最終目的地だった場所だ。そこで事情聴取を受け、それからイスラマバードの大使館に向かった。大使館では相澤さんが待っていた。こうして、彼らの冒険は終わった。すべて終わった、はずだった。

飛行機の離陸音。
飛行機の中。

沢渡　坂本君、いいかな。
坂本　え。
沢渡　朝日新聞の沢渡と言います。（名刺を出す）
坂本　はい。
沢渡　お疲れのところ申し訳ないけど、成田までのあいだ、話を聞かせてもらっていいかな。
坂本　はい。
沢渡　許可証が降りてなかったらしいね。

坂本　はい？　許可証。
沢渡　許可証が降りてないのに、シンド州に入ったんだよね。
坂本　ちょっと待って下さい。それ、何の情報ですか。
沢渡　君たちと同宿した女性ルポライターが証言してるんだよ。
坂本　はい？
沢渡　文春の記事、読んでない？
坂本　文春？
沢渡　週刊文春。
坂本　読んでません。
沢渡　そうか。

沢渡、週刊文春を見せる。

沢渡　なんで引き返せなかったのかな。宿の人もこの女性も止めたんだよね。
坂本　……私は見た。早大生三人の甘えと無知……。
沢渡　あと、発色カラーのウエアってのもほんと？　なんでそんな恰好したの。
坂本　（何か言おうとする）

飛行機の着陸音。
成田空港。
後藤と合流する坂本。

後藤　坂本！
坂本　後藤！
後藤　大丈夫だったか。
坂本　読売の取材受けたんだろ。俺、朝日だった。
後藤　朝日……。
坂本　文春の記事見たか。
後藤　見た。
坂本　ふざけんなよ。
後藤　むちゃくちゃ書かれてたな。
坂本　俺たち、あの女、会ってないよな！
後藤　ああ、会ってない。
坂本　でも、あの記事が本当だと思ってる。
後藤　坂本。読売の人が言ってたんだけど、朝日新聞らしい。
坂本　何が。
後藤　飛行機とばしたんだよ。朝日が！　取材のために！

坂本　はあ？
後藤　４月１０日頃、軍の偵察機が来たって、アジト移動しただろ。軍じゃなかったんだよ。あれは朝日がチャーターした飛行機だったんだよ。
坂本　なんだよ！　それ！　あれがなかったら俺たち、もっとはやく！
後藤　だめだぞ。
坂本　え？
後藤　記者会見ではその話はするな。
坂本　なんでだよ！
後藤　みんな文春の記事を信じてるんだ。俺たちに味方する人なんていない。
坂本　なんだよ！　あんなの全部嘘だろ！
後藤　でも本当なんだよ！　やつらにとっては。俺たちが何言っても言い訳としか思わない。
坂本　ふざけんなよ！
後藤　とにかく何も話さなきゃいいんだ。何も話さなきゃ、何も書きようがない。
坂本　でも……！
後藤　謝るんだ。
坂本　後藤。
後藤　謝ろう。

フラッシュがたかれる。
記者会見。

記者　日本中に迷惑をかけたことについて、どうお考えですか！

坂本、後藤、報道陣に囲まれている。

坂本　いろいろな方にご迷惑をかけたことを反省すると同時に感謝しています。
後藤　すみませんでした。
坂本　僕たちのおこなった軽率な行動でたくさんの方にご迷惑をおかけいたしました。たいへん申し訳ありませんでした。

パパラッチに追われるように帰る坂本。
坂本、家のドアを閉める。
電話が鳴る。

坂本　もしもし。
電話の男　おー、坂本か？

坂本　はい、どなたですか。
電話の男　お前らは馬鹿か？
坂本　……えっと、あの……。
電話の男　冒険旅行？　ふざけるんじゃねーよ。さんざん人に迷惑かけまくって、腹切ってしね。親の顔がみたいわ。テレビに映っていた態度がデカイんだよ。反省してんのか。馬鹿野郎。おい、聞いてんのか！

坂本、電話を切って、外へ飛び出す。
ドアを開けるとパパラッチたちが待っている。

パパラッチたち　坂本君！　坂本君！
パパラッチ１　坂本君、ちょっと話聞かせてくれないかな！
パパラッチ２　大学はどんな処分を下したの。
パパラッチ１　サークルは廃部？　どうなったの？
パパラッチ２　結局、身代金は払ったの？
坂本　何もお話しすることはありません。

坂本、パパラッチから逃れて電車に乗る。
電車が駅につく。
電車から降りようとするが、男たちが乗りこんでくる。
倒されてしまう坂本。
坂本の上に大量の手紙が降って来る。
男たち、手紙を拾い、読み始める。

男たち　坂本博康さま　前略　この度誘拐事件から無事解放されて皆様もさぞ安心された事におよろこび申し上げます。さて他人ですが、一言申し上げます。周囲から注意されたにもかかわらず強行されたこと、最高学府にいる方の行動としては大変非常識です。その為、方々にかけた迷惑、言葉で謝ればよい事では有りません。家族の方もどうかそれは認識されて本人に人生の有り方をよく諭して頂きたい。よくよく反省されてその償いを十分果たして下さい。

逃れようとする坂本を取り押さえる男たち。
坂本を地面に叩き付ける。
動けなくなる坂本。
テーブルで女が手紙を書いている。

女　早稲田大学教育学部長様

前略ごめん下さいませ。
パキスタンで誘拐された学生の事で申し上げます。
解放されたというニュースを聞いても新聞に掲載された写真を見ても「おめでとう」「よかった」という気持ちにはなれません。日本を代表する名門大学に学ぶ学生達が大使館の再三にわたる制止も聞かず、パキスタン政府の許可も得ないまに、危険地域に入ったという事は重大な誤りで、日本人としての自覚も無い三人に怒りを覚えます。現地の大使館にも腹が立ちます。大使館は国民の税金で運営されているものです。人命救助と申しても、海外において不可抗力で苦難に見舞われた人の事はどんな事でもして助けなければならないでしょう。しかし、此の三人は大使館にも、パキスタン政府にも、後足で泥をかけて、自分達の欲望のため遮二無二川をくだって行った人達です。命の保証はこの時点で自ら放棄しているはずです。

坂本、頭を上げる。

解放された時、皆さんに迷惑をかけて申し訳ないと謝りながらも、でも僕達の気持ちもわかって下さいと言ったそうですが、反省していない何よりの証拠ではないでしょうか。折しも湾岸戦争が勃発し世界中が緊張している時、のんきに無謀な冒険を決行する神経は自分の事しか考えない幼児そのもので、とても二十才を過ぎた男性とは思えません。
名門早稲田の名誉も大いに傷つけられて了いました。私の親戚も早稲田のＯＢが何人かおりますが、皆大変怒って、恥さらしなことをしてくれたものだとあきれております。本当に腹が立って腹が立ってたまりません。この「教育」学部の学生達に対して大学側が今後どの様な処分をなさるか目を皿の様にして見ております。

女

私の親戚のＯＢ
兄　……　文学部中退
義理の兄二名　……　理工学部卒
義理の弟一名　……　理工学部卒
甥　……　理工学部卒
姪の婿　……　理工学部卒
私も早稲田を愛しております　６５才の女性

男たちと女、去る。
坂本、手紙を握りしめて、部室に辿り着く。
ドアを開ける。
後藤がいる。

坂本　後藤。

後藤、灰皿の上で何かに火をつける。

坂本　何やってんだよ。

後藤　名刺。読売新聞、フラッシュ、週刊新潮、アサヒ芸能……。

坂本　……。

後藤　俺、円形脱毛症になっちゃった。

坂本　……。

坂本、部室から出る。

友人がやってくる。

友人　おー、坂本――！　無事でよかったなあ。

坂本　おー。

友人　退学なんなくてよかったなあ。

坂本　うん。

友人　今度、クラスの奴らでおまえのお疲れ会やってやるからな。

坂本　ありがとう。

友人　けど、おまえら無茶し過ぎ。

坂本　え？

友人　パキスタン政府の許可出てなかったんだろ。

坂本　……いや、それは……。

友人　もう迷惑かけんじゃねえぞ。

坂本　……。

友人　あ、ねえ、サインちょうだい。サークルの女の子におまえと友達だって言ったら、サインもらってきてって言われてさ。あ、これでいいや。

ノートを差し出す。

坂本、黙ってそれを返して、去る。

友人　はあ？　調子のってんじゃねーよ！

坂本、家に帰って来る。

握りしめていた手紙を見る。

坂本、手紙をポケットにねじ込む。

編集部。
飯倉が川瀬を連れてやってくる。
川瀬、白衣を着ている。

飯倉　坂本ちゃん。ライターの川瀬ちゃん。
川瀬　どうも、初めまして。ライターの川瀬です。
坂本　あ、どうも。
飯倉　じゃ、頼んだよ。

飯倉、去る。

坂本　あー、あの、あんまり詳しく聞いてないんだけど。
川瀬　えっと、今、「1億人の性体験」っていって、スッチーとかいろんな職業の女の人のセックス事情を取材する短期連載やってるんですよ。
坂本　はあ。
川瀬　で、今回、女医なんですけど、取材はなんとかセックスって言葉は使わず、恋愛とかオブラートに包みながらやり遂げたんですけど、さすがに写真は撮らせてもらえなくて。なんで、とりあえず私が。
坂本　あ、そういうこと。
川瀬　ま、本人でも顔は出さないし、誰がやっても同じなんで。お願いします。

川瀬、手で顔を隠して、座る。

坂本　あー、もうちょっと口は見えたほうがいいかも。
川瀬　あ、はい。

坂本、シャッターを切り始める。

川瀬　胸元、もうちょっと見せたほうがいいですか。
坂本　そうかな。
川瀬　足、組みますね。
坂本　うん。

川瀬、足を組む。
坂本、撮り続ける。

坂本　どうだったの。女医さんは。

川瀬　普通ですね。患者とどうのってのはなかなか聞けなくて。同僚との夜勤明けのセックスが限界でした。
坂本　ふうん。川瀬さんって、この前、宗教団体に潜入した人？
川瀬　あ、はい。
坂本　あれ、しんどくなかった？
川瀬　行く前はイヤでしたけど、まあ、しょうがないですよね。行ったら、超面白かったし。
坂本　そっか。
川瀬　坂本さんって週刊現代の専属ですか？
坂本　そうだよ。
川瀬　すごいですね。
坂本　別に。たまたま暗室マンに空きがあって、その流れで。
川瀬　私、今、専属記者にならないかって言われてるんですけど、さすがにそれはやめとこうかなあって思ってるんですよ。
坂本　専属記者は大変だよ。
川瀬　週刊誌はまず取材力じゃないですか。でも、私、別に得意分野ないし、あ、私が前いた編集プロダクションの人でひとり現代の専属になった人いるんですけど、その人、ブルセラとか超詳しいんですよ。そういうの私ないし、そうするともうフットワーク軽く何でもやるしかないわけで、特に女っていうとある種のものが多くなるわけで、ま、さすがに現代でそこまでひどいのはないと思いますけど。
坂本　宗教団体潜入でも十分でしょ。
川瀬　いやいやいや。編プロ時代に、裏モノジャパンっていう雑誌に挨拶行かされたことあるんすけど、単刀直入「どこまでやれる？」って聞かれましたからね、もうね風俗の面接と変わんないっつう。あ、もうちょっと前屈みになります？
坂本　いや、そのままでいい。わざとらしすぎる。
川瀬　あ、そうでした。まあ、専属は悪い話じゃないですけど、毎週、潜入取材っていうのはちょっときついかなっていうのもあって。
坂本　……。
川瀬　取材は好きなんですけどね。私、小説も書いてて、だから、まあ全部そのためだと思えば大概いけるんですけど。
坂本　小説。
川瀬　ま、どうなるかわかんないですけどね。そんな簡単に小説家になれないし。修行っす。あ、もう大丈夫ですか。
坂本　あ、うん……。

川瀬、去る。
雑踏の音の飲み込まれていく坂本。

喫茶店。
後藤と杉村がやってくる。

後藤　坂本。
坂本　杉村さん。
杉村　ご無沙汰しています。
ウエイター　いらっしゃいませ。（水とメニューを置いていく）。
杉村　からだは大丈夫？
坂本　はい。元気です。
杉村　よかった。
坂本　今日はこんな機会を作っていただき、本当にありがとうございます。
杉村　いいんだよ。
坂本　でも、僕たちの問題なのに。
杉村　いや、僕も、大使館員として責任を感じてるんだ。大使館まで調べものに来た君たちに必要な情報を提供することができなかった。ただ、これだけはわかってほしい。僕たちも君たちを危険な目を合わせようと思ってたわけじゃない。実際、ダコイトの情報はこれまで日本にほとんど入っていなかった。君たちも行ってわかったと思うけど、パキスタンは北部と南部、パンジャーブ州とシンド州では気候から言語まですべて違う、言ってしまえば別の国だ。実際、今回のことで、僕たちも反省した。イスラマバード経由で東京に入って来る情報だけでは、パキスタンを半分も理解したことにはならない。本当に申し訳なかったと思っている。
坂本　いや、僕たちが甘かったのがいけないんです。
後藤　そうです。現地できちんと判断すべきでした。
杉村　いや、若い学生さんをこんな危険な目に遭わせたのは大使館の責任だ。それなのに、僕たちのことはまったく報道されず、君たちばかりが矢面に立たされている。こんなのはおかしいんだよ。
坂本・後藤　はい。
杉村　事実関係もきちんと伝える必要がある。だから、こういう機会を設けさせてもらった。
坂本　向こうは何か言って来てますか。
杉村　いや、今のところは何も。
後藤　緊張してきた。
坂本　大丈夫だ。とにかく言うべきことはちゃんと言おう。
後藤　うん。
杉村　あ……。

狭川と矢田が立っている。

狭川　週刊文春の狭川です。
杉村　在日パキスタン大使館、大使館員の杉村です。
矢田　ルポライターの矢田あつ子です。

名刺を交換する、杉村、狭川、矢田。
狭川、坂本と後藤にも名刺を差し出す。

坂本　坂本です。
後藤　後藤です。

矢田は名刺を出さない。
全員、座る。

杉村　頼みます？
狭川　アイスコーヒーを。
矢田　私も。
杉村　君たちは。
坂本　アイスコーヒーで。
後藤　僕も同じのを。

杉村、ウエイターを呼ぶ。

杉村　アイスコーヒー5個ね。

ウエイター、去る。
沈黙。

杉村　（狭川、矢田に）今日、こうしてお呼びしたのは、（文春を出して）こちらの記事に書かれていることで、ちょっと事実と異なっている部分があってですね、坂本君と後藤君からきちんと事実関係を伝えたほうがよいと思ったからです。こうやってね、一方的に記事を書くのはできますが、それに対して何も言えないのではね、彼らも苦しいので。
狭川　はい。
杉村　実際、この記事が出たことで、かなり世間の論調が変わってしまった。でも、そのとき、彼らはまだ解放されていなかったから何も言えなかった。そうしている

間に、あなた方の記事をもとにほかのマスコミも取材を進め、さらに読者もそれを信じてしまった。

狭川　はい。

杉村　そうした人たちから今、手紙や電話が来ているんだよね。

坂本・後藤　はい。

杉村　そういったことの発端には、私たち大使館が情報を提供できていなかったこともあるんです。でも、それは報道されていません。今日は、そのあたりをきちんと話し合えたらと思います。

アイスコーヒーが運ばれて来る。

杉村　坂本君、後藤君、何かある？

坂本と後藤、顔を見合わせる。

坂本　（意を決して）あの、最初に聞きたいんですけど、矢田さん。

矢田　はい。

坂本　僕たちはあなたにお会いしてないですよね。

矢田　……。

坂本　日本人女性の経営する民宿とあるから、おそらく同じ宿には泊まっていたと思います。でも、お会いしてないですよね。

矢田　……。

狭川　矢田さん。

矢田　……。

坂本　会ってないですよね。ここには話をしたって書いてありますが。

矢田　この記事にはそうありますね。

坂本　え？　どういうことですか。

矢田　だからこの記事にはそうありますねって。

後藤　何言ってるんですか。これはあなたが書いたんですよね。

矢田　これは私の書いた記事じゃありません。

坂本　ちょっと待ってください。「私は見た」って書いてあるじゃないですか。ここにあなたの名前も載ってる。「ルポライターの矢田あつ子さんは語る」って。これはあなたの書いた記事ですよね。

矢田　だから、語ったんです。

坂本　え？

矢田　私は、狭川さんから電話取材を受けただけです。だから、これは私の書いた記事ではありません。

坂本　じゃあ、誰が書いたんですか。
狭川　私です。
坂本　じゃあ、ここに書かれていることのすべての責任はあなたにあるんですね。
狭川　私です。ですけど、コメントの内容は矢田さんから伺ったことです。
坂本　待って下さい。それってコメントの中身には自分は責任を持たないって言ってるわけですか。
杉村　（坂本に）落ち着こう。（狭川と矢田に）ひとつひとつ確認していきましょう。
（坂本に）まず、これだよね。許可証のこと。
坂本　はい。許可証が出てないのに僕らが川下りを続行したと書いてますが、そもそも川下りに許可証なんてものは存在しないんです。
矢田　……。
狭川　（矢田に）そうなんですか。
矢田　――でも、許可証が降りるまで、一ヵ月宿に滞在していましたよね。
坂本　登山には入山許可証というものがあります。でも、本来、川下りには許可証は存在しません。川を下ることは、自由なんです。
矢田・狭川　……。
坂本　でも宿の人が僕たちを心配して、何か許可証を持っていったほうがいいと言いました。なんでもいいので書類を持ってれば、警察の検問があったとき、余計な手間がいらないって。そこで、僕たちは、登山の事務所に行って、許可証をもらうことにしました。向こうにしてみても、川下りの許可証を出したことなんてないので、戸惑っていました。だから、許可証が出来上がるまで一ヵ月かかったんです。危険だからと足止めされていたわけじゃないんです。
矢田・狭川　……。
坂本　彼らも前例がないので、とりあえず彼らの管轄であるパンジャーブ州内の５０キロの許可証を出したんです。だから、確かにシンド州に入ってからの分の許可証は持っていませんでした。でも、本来、川を下るのに、そのようなものは必要ないんです。
矢田・狭川　……。
坂本　この記事は、川下りのことを理解しないまま、あくまでも登山の常識のもとで書かれているんです。
矢田　そうだとしても、
坂本　そうだとしても？
矢田　いえ。なぜ、引き返す勇気を持てなかったんですか。
坂本　引き返す勇気ってなんですか。確かに登山では、天候などの状況によって計画を中断することはあるでしょう。でも、川下りは別に何か危険が目の前に見えるわけじゃない。あなたもパキスタンに行ったことがあるからわかるはずですが、イ

ンダス川は上流のほうは多少流れが激しい場所もありますが、基本的にゆるやかな流れです。危険な場所はありません。

狭川　でも、ダコイトという危険が、

坂本　あなたはダコイトという言葉を何で知りましたか。

狭川　え？

坂本　今回の事件で初めて知ったんじゃないですか。なのに、まるで最初から知っていたかのように書いてます。これじゃあ、僕たちが知ってて行ったバカみたいだ。

杉村　狭川さん、大使館のほうですらダコイトの情報は把握できていませんでした。ですから、出発前に彼らが知るのは不可能でした。事前に彼らに注意を呼びかけられなかったのは私たちの責任です。

狭川　……。

杉村　彼らは出発の半年前から大使館に何度もリサーチに来ています。けっして無計画だったわけではないんです。

狭川　そうですか。

坂本　それから、この発色カラーのウエアというところですが、これも川下りでは水に落ちたときに救助しやすいよう派手な服を着るのは常識です。だから、そういった服を着ていてもおかしくないんです。それでも、僕たちも目立ちすぎるのはよくないと派手な服は宿に置いて出発しました。でも、この書き方じゃ、まるでそういう恰好をしていて捕まったみたいじゃないですか。

矢田　……。

坂本　あなたは、僕たちに会っていないですよね。

矢田　……。

坂本　あなたは宿の主人に僕たちの話を聞いただけじゃないんですか。

矢田　私は、２月１３日から５日間、宿に泊まっていました。

坂本　でも会ってないですよね。万が一廊下ですれ違ってたとしても、この記事にあるように話はしていないですよね。

矢田　……。

坂本　あなたに本当に「やめなさい」と止められたならこう書かれても仕方ないです。でも、あなたはその場では何も僕たちに言ってない。なぜか。会ってないからだ。それをいかにも直接止めたかのように書いてる。

矢田　……。

坂本　ここには、何ひとつ本当のことなんて書かれてない。なのに、こんなのが全国で売られてみんなこの記事を信じている。みんな、この、嘘、を信じて、僕たちに接して来るんです。どうなんですか、矢田さん。

矢田　……。

坂本　なんで、黙ってるんですか！

杉村　坂本君。

沈黙。

後藤　あの……。

杉村　後藤君？

後藤　この記事はどうして書いたんですか。

狭川　どうして？

後藤　この記事は何のために書いたんですか。どういう目的で書いたんですか。

狭川　目的。

後藤　――僕はこの事件があるまで、マスコミに就職するのが夢でした。権力を監視する、隠された真実を提示する、そうやって世の中を少しでもよくしていく。僕はジャーナリズムをそういうものだと思っていました。そうではないんでしょうか。

狭川　そうだよ。

後藤　――じゃあこれは、何のために書いた記事ですか。どういう志のもとで書いた記事ですか。

狭川　これは警鐘のために書いた記事です。

後藤　警鐘？

狭川　最近、海外旅行がブームだけど、その分、日本人の甘さや無知が目立つようになっていて、君たちのことだけじゃなく、いろいろな事件・事故が多発している。それに対して警鐘を鳴らさなくてはいけないと、こういう記事を作ったんです。僕は君たちのことを個人的には心配していたし、無事に早く助かることを祈っていました。でも、社会的な意味を考えると、警鐘を鳴らすことが必要だと思ったんです。

後藤　矢田さんもそうですか。

矢田　はい。私も社会的にこの取材は意味があると思って受けました。

後藤　その結果が「バカ大学生の甘えと無知」といって僕らの顔写真を並べることですか。そんなふうに書かなきゃ伝わりませんか。

矢田　だから、どういう記事になるかは、知らなかったんです。私はただ、電話で話をしただけです。私の真意が伝わらずに歪められた部分があったとしても、私の知るところではありません。

後藤　なんでそんなふうに人ごとみたいに言えるんですか。原稿は見たんですよね。

矢田　見ていません。

後藤　見てない……？

狭川　うちの雑誌では基本的に取材対象者に原稿確認はしないことになっているんです。

後藤　どうして？

狭川　新聞や週刊誌は一部を除いてだいたいそうです。

後藤　なんでそんなことになっているんですか。
狭川　取材対象者のバイアスがかかるからです。
後藤　どういう意味ですか。
狭川　チェックをさせることで、結果として取材対象者の思惑通りに記事が構成されてしまう恐れがあるということです。記者の主体性を守り、記事の客観性を保つためにも、検閲は拒否しているんです。それは読者の知る権利を守るためにも必要なことなんです。
後藤　……（混乱している）。
狭川　それはご理解ください。
坂本　おかしくないですか。
狭川　え。
坂本　このケースでそれはおかしくないですか。
狭川　……。
坂本　今、あなたが言ったことは、たとえば国の機関だったり、企業だったりそういうものに対して取材するときには当てはまるかもしれません。でも、この記事の場合は、事実を確認することが必要じゃありませんか。
狭川　……。
後藤　そうだ。それは矢田さんに確認を取らない理由にはならない。
狭川　……。
後藤　矢田さん、あなたも、なぜ原稿を見せてもらわないんですか。自分の発言が歪められて報道されて、それでジャーナリストとして恥ずかしくないんですか。
矢田　……。
後藤　狭川さん、あなたもこんないい加減な記事を作って、編集者として恥ずかしくないんですか。
狭川　……。
坂本　これは事実じゃないんですよね。認めて下さい。
矢田　……。
狭川　いえ、これも事実です。
坂本　は？
狭川　あなた方にはあなた方の事実があるように、矢田さんには矢田さんの事実があり、私には私の事実がある。
坂本　は？　何言ってるんですか。
狭川　電話取材ですから、細かいところまではきちんと表現し切れていないかもしれません。私のほうで受け取るときに、微妙なズレが生じていた部分もあるかもしれません。言い回しについては少し変わっているかもしれない。でもそれも事実のひとつの形です。しかし、君たちが危険な冒険をした、その「事実」は変わらない。そうだよね。

坂本　いや、だから、そういうことではなくて、
狭川　いずれにせよ、ニュアンスの違いです。
坂本　ニュアンスの違い……。
狭川　読者もそうです。
坂本　はい？
狭川　読者の受け取り方もさまざまです。
坂本　どういう意味ですか。
狭川　君たちにはこの記事が君たちを批判する記事に見えるかもしれません。でも、多くの読者は警鐘として受け取っているはずです。
坂本　じゃあ、なんで僕らを批判する手紙が来るんですか。何通も何通も来るんです。電話だってかかってくるんです。実家には母を否定する手紙が届いています。それは、これが警鐘を鳴らす記事じゃなくて、僕たちを叩く為の記事だったからじゃないですか。
狭川　だから、それは読者の受け取り方の問題です。
坂本　……。
杉村　……。
坂本　……。
杉村　……（何か言おうとして詰まる）。
坂本　杉村さん。
杉村　坂本君？
坂本　もういいです。
杉村　え。
坂本　もういいです。

照明切り替わる。
狭川と矢田、帰っていく。
杉村、申し訳なさそうに去る。
後藤、苦々しい表情で去る。
坂本、ひとりになる。
ポケットからぐしゃぐしゃになった手紙を出す。

坂本　坂本博康君のお母さま。先日、冒険旅行中にお宅の息子さんが誘拐された事件、世間に迷惑をかけたこと、それに対して反省の色もないこと、親としてどうお考えですか。頭はよいのかもしれませんけど、常識はないのですね。立派なお子さんを持ち、うらやましい限りです。

坂本、手紙を握りしめて、再びポケットに入れる。

２０００年。
編集部。
川瀬、飛び込んで来る。

川瀬　さかもとさーん！　お疲れさまでーす。
坂本　お、今日は、何。
川瀬　やっぱわかんないですよねー。バスガイドです。
坂本　バスガイド。
川瀬　スッチーもやった、女医もやった、っていうことでちょっとネタ切れになってきました。じゃ、お願いします。

川瀬、手で顔を隠す。
坂本、撮り始める。

川瀬　飯倉さんから聞いたんですけど、坂本さんって、昔、誘拐されたことあるんですよね。
坂本　ああ。
川瀬　気になって昔の文春の記事も読んじゃいました。
坂本　ああ、あれね。あれ、よくできてるよね。
川瀬　はい？
坂本　いや、あれ４ページあったでしょ。ほかの雑誌は、俺たちが何も喋んなかったから、寄せ集めの情報で１ページ作るのが限界だったのに。しかも、矢田あつ子のコメントだけでほとんど構成してる。文春的には、矢田に取材できた時点で勝ちだよね。相当効率のいい記事だよ。
川瀬　はあ。
坂本　俺、あの記事書いた奴らと会ったんだけどさ。
川瀬　え？　そうなんですか。
坂本　今思えば完璧な対応されたよ。
川瀬　完璧？
坂本　俺らとしては事実関係を確かめたかったんだけど、絶対に間違いを認めなかった。謝罪すらしなかった。
川瀬　まあ、そうでしょうね。あの事件のあとってどうなったんですか。
坂本　半年くらい自粛したよ。海外行くのもやめた。もともと俺たちのサークルってカヌーよりラフティングがメインだったんだけど、
川瀬　ラフティング？
坂本　ゴムボードで急流下るやつ。
川瀬　ああ。

坂本　４年生のとき、それで学生日本一になった。
川瀬　すごいじゃないですか。
坂本　川下りでさ、マイナスになったから、川下りで取り戻したかったんだよね。
川瀬　へえ。
坂本　結局大学は６年いて、卒業してから１年くらいかけてアイルランドとかボスニアとかまわりながら写真撮って、で、一文無しで帰って来たところを週刊現代に拾われたっていう。
川瀬　なんでカメラなんですか。
坂本　もともと好きだったものあるけど、写真には真実があると思ったんだよ。
川瀬　真実？
坂本　文章はどうとでも書けるじゃない。人の主観も入るし、いくらでも曲げられる。それがあの事件の報道でいやってほどわかった。でも、写真には嘘がない。そこに写っているものがすべてだ。
川瀬　うーん。キャプション次第で印象は変えられそうですけど。
坂本　それでも、文章だけで伝えるより、送り手と受け手の間に齟齬がない。
川瀬　ライターとしてはそうですね、とは言いにくいです。
坂本　文章には文章の役割があると思うよ。
川瀬　でも、なんで週刊現代なんですか。
坂本　え？
川瀬　いや、カメラマンやるならほかにもいろいろありますよね。でも、なんで現代に入ろうと思ったんですか。週刊誌にイヤな目に合わされたんですよね。
坂本　なんていうか、ひとりくらいパパラッチに追われたことのある人間がパパラッチをやっててもいいかなと思って。
川瀬　うん？
坂本　追われることの痛みを知ってる、そういう人間だから撮れるものがあるのかなって。
川瀬　はあ。
坂本　うん。
川瀬　あの。
坂本　何？
川瀬　よく、わからないです。
坂本　……ちょっと、レンズ変えるから待ってて。

坂本、カメラを準備し始める。
川瀬、坂本のカメラバッグの封筒を手に取る。

川瀬　わー、すごい。

坂本　え？

川瀬、坂本の封筒の中身を見ている。

川瀬　これってあれですよね、あの……

坂本　何してんだよ！

間。

川瀬　すみません。

坂本　（封筒を奪う）勝手に見てんじゃねえよ！

川瀬　すみません。

坂本　……。

坂本、落ち着きなくなる。

坂本　ふざけんなよ……。

川瀬　……。

坂本　……。

川瀬　すみません。

坂本　……。

間。

川瀬　それ、女子マラソンの。

坂本　そうだよ。

川瀬　林田。

坂本　そうだよ。シドニーオリンピック決まった、林田ミキだよ。

川瀬　はい。林田ミキ。のパンチラ。

坂本　練習撮りに行ったらたまたま撮れたんだよ。

川瀬　たまたま。

坂本　フェンスの外から撮ってたら、俺の目の前でしゃがんだんだよ。俺が見えなかったんだな。

川瀬　目の前でしゃがんだから撮ったんですか。

坂本　撮るよ。カメラマンなんだから。

川瀬　なんで見ちゃいけないんですか。

坂本　……。あのなあ、君もわかるだろうけど、誌面に載る前のネタ見られたら嫌だろ。

川瀬　はい……。
坂本　ごめん。
川瀬　……。
坂本　撮ろうか。

川瀬、目を隠す。しかし、すぐに手を下ろす。

坂本　……。

坂本もカメラを下ろす。
川瀬、坂本を見ている。

川瀬　坂本さんって、記憶喪失なんですか。
坂本　は？
川瀬　パパラッチに追われた痛みを知ってる人間にしか撮れないものがあるって。
坂本　……。
川瀬　痛みを知ってるなら、なんでやるんですか。

川瀬を睨みつける坂本。

坂本　……。
川瀬　……。

坂本、カメラを完全に下ろす。

坂本　悪いけど、ほかのカメラマンに撮ってもらえる。飯倉さんには言っておくから。
川瀬　痛みを知ってるなら、なんでやるんですか。それって、俺は人に刺されたことがあるから、刺されたことのない人とは違う刺し方ができる、そう言ってるのと同じですよね。
坂本　あのさ、君はなに？
川瀬　なんでもないですよ。
坂本　人のこととやかく言えるの？　じゃあ、君は何のためにこれやってるの？　ねえ？　このセックス特集に何の社会的意義があると思ってるの？
川瀬　私は、意義なんてないと思ってやってます。
坂本　は？

川瀬　これ読んで不快に思う人間がいるのはわかりますよ。だって、私が不快だもん。女バカにすんのもいい加減にしろって思いますよ。でもわかってて、やってます。これが人を傷つけるってわかってててやってます。

坂本　は？　だったら、やめろよ。

川瀬　やめませんよ。社会的意義なんてないし、人を傷つけるかもしれない。でもやりますよ。

坂本　読者が喜ぶからか。だったら俺もそうだ。読者が求めているから撮るんだよ。

間。

川瀬　それ本心ですか。

坂本　そうだよ。今、週刊現代には８０万人の読者がいる。俺はその読者のために写真を撮っている。

川瀬　それが、このパンチラですか。

坂本　――そうだ。

川瀬　私は違います。読者のためになんて送り手側の理由でしかないんですよ。私は、自分が面白いと思うからやってます。

坂本　今、不快だって言っただろ。

川瀬　内容は不快ですよ。でも、取材することが、記事を書くことが、面白いからやってます。

坂本　結局なんだ。自分の快楽のためにやってるって言いたいのか。

川瀬　そうです。

坂本　それは、あんたがこの仕事腰掛けでやってるからだろ。何が小説家だよ。小説家になんなら、今すぐやれよ。何違うことやってんだよ。どっかでなれねえって思ってんだろ。

川瀬　じゃあ、あなたは本気でこの仕事やってるんですか。社会的意義のために、読者のために、この仕事してるんですか。一生の仕事だと思ってやってますか？

間。

川瀬　あなたも同じじゃないですか。

坂本　は？

川瀬　写真を撮ることに高揚感を感じてる。だからやるんじゃないですか。

坂本　……。

川瀬　なんでそう素直に言えないんですか。

坂本　……。

川瀬　自分はパンチラの写真を撮ることに快感を感じている。その写真が誌面に載ることに快感を感じている。

坂本　違う。

川瀬　でも、そうは言いたくない。

坂本　あ？

川瀬　取り戻すって何ですか。

坂本　は？

川瀬　川下りでマイナスになった分取り戻すって、何を取り戻すんですか。それは川下りで本当に取り戻せたんですか。

坂本　何言ってんだよ。

川瀬　誘拐事件で負けたのが今も悔しくて悔しくてしょうがないから、勝とうとしてるだけなんいじゃないですか。人を攻撃して、それで失われた何かを取り戻そうとしてる。だけど、それはいつまでたっても取り戻せない。

坂本　違う。

川瀬　取り戻すとかそんなことにこだわってるから、変な理論武装しないとやっていけないんですよ。パパラッチに追われたことのある人間にしか撮れないものがある？　どういう理屈ですかそれ。そんなの言い訳にもなってないですよ。

坂本、椅子を蹴飛ばす。

川瀬　……。

坂本　おまえに何がわかる。

川瀬　……。

坂本　生きて帰って来たんだ。殺されてもおかしくないところから、生きて帰って来たんだ。それなのに、みんな俺に死ねと言う。俺は死ねばよかったのか。なあ、俺は死ねばよかったのか！

川瀬　……。

坂本　母親と俺宛に手紙が来んだよ。最近こんなに腹のたったことはありません。死ねばよかったのです。恥ずかしいでしょう。あなたも親も。

川瀬　……。

坂本　誰なんだよ！　名前も書かねえで！　そんな手紙が来るんだよ！　その痛みから自分守るために、理論武装して何が悪い！　なあ！　何が悪い！（川瀬の肩をつかむ）

間。

川瀬　痛いです。

坂本　……（手を離す）。
川瀬　別のカメラマンさんに撮ってもらいます。
坂本　……。
川瀬　なんで、あれ（写真）、隠してたんですか。

川瀬、去る。
坂本の部屋。
後藤がやって来る。坂本に缶ビールを渡す。

後藤　かんぱーい！
坂本　かんぱーい！
後藤　俺たち圧倒的だったな。
坂本　コース取り、完璧だったな。
後藤　美しいを通り越して神々しかったな。
坂本　水面に道が見えたね。
後藤　４番の瀬やばかったな！
坂本　まーさーかーのー、
後藤・坂本　隠れ岩！
後藤　右よけ正解だったよ！
坂本　いやあ、ホントおまえの舵取りに助けられたぜ！
後藤　いやいや、最後のとろ場のおまえの馬力がなかったら危なかったぜ！
坂本　イッパチのやつら泣いてたぞ！
後藤　俺たちに勝とうなんて１００年はえーんだよ！
坂本　はえーんだよ！
後藤・坂本　かんぱーい！
後藤　これで心置きなく卒業できるよ。
坂本　卒業。
後藤　あれ、おまえ、単位足りないんだっけ。
坂本　うん……。
後藤　いいじゃん。来年も出れるぞ。
坂本　あ、そっか。
後藤　とにかく、やり切ったな。
坂本　まあ、そうだな。

間。

後藤　坂本。

坂本　ん？
後藤　俺、医者になるよ。
坂本　え？　医者？　だって、おまえ教育学部。
後藤　うん。でも、なんていうか……普通に就職するのはやめたんだ。
坂本　マスコミは。
後藤　三社受けたけど落ちた。当然だと思う。なんか違うなって思いながら受けたから。
坂本　じゃあ、今から医大に入るってことか。
後藤　うん。卒業したら1年実家に戻って頑張ってみる。国立以外は難しいから死ぬ気でやるよ。
坂本　そうか。
後藤　人生どうなるかわかんないけどな。相澤さんも今じゃすっかり商社マンだしなあ。
坂本　相澤さんは要領いいから。
後藤　要領ってそんな言い方ないだろ。
坂本　パキスタンだって、あの人は結果として8日間の拘束で済んだ。
後藤　じゃあ、あの状況でおまえひとりでも行けるかよ。あの人は命かけて行ったんだ。
坂本　……わかるよ。でも、違うんだよ。8日と44日じゃ。

間。

後藤　おまえどうするの？　卒業後。
坂本　わかんない。
後藤　わかんないって。
坂本　どうでもいいんだ。
後藤　……。
坂本　冒険家にももうなれねえし。
後藤　……。
坂本　全部、あいつら、あの文春のやつらのせいだ。
後藤　……。
坂本　あの記事さえなければ、こんなふうにならなかった。
後藤　……。
坂本　俺はあいつらを絶対許さない。

間。

後藤　――坂本。
坂本　ん？

後藤　いつまでこだわってんだ。
坂本　……。
後藤　あれからもう2年だぞ。

間。

坂本　……なんで。
後藤　え？
坂本　なんで、そんな簡単に許せるんだよ。
後藤　許す？
坂本　あんな目に遭わされて、なんで許せるんだよ。
後藤　別に許したわけじゃない。でも仕方ないだろ。
坂本　それは割り切れってことか。
後藤　え？
坂本　あいつらがやったことは仕方なかったってあきらめろって。
後藤　違うよ。
坂本　そうだろ。マスコミがああいう報道するのは当然だって認めたってことだろ。なんだよそれ。
後藤　そんなこと言ってねえだろ。
坂本　じゃあ、仕方ないってどういう意味だよ。
後藤　「考えても」仕方ないって言ったんだよ。
坂本　……。
後藤　俺はあいつらの名刺を全部燃やした。手紙も全部燃やした。それで、終わりにしたんだ。
坂本　……。
後藤　俺は誘拐された時点で将来マスコミに行くのは難しいと思った。そこであいつらと会って、すっかり幻滅した。俺は早く現実が見られてよかったと思ってる。
坂本　……。
後藤　俺だっておまえと同じように許せなかったよ。でも、だから、俺はそこで勝負するのをやめたんだ。
坂本　……。
後藤　あいつらと同じ土俵には上がらない。俺は手に職をつける。そうすれば、何があっても生きていける。
坂本　……。
後藤　俺の言ってること、おかしいか？
坂本　おかしくない。でも、俺は……！
後藤　前、見ろよ。

坂本　……。

間。

後藤　俺たちはインダス川で誘拐された。４４日間監禁された。日本に帰って来て批判された。でも、俺はその現実を恨んだりはしない。俺はその経験を持って、これからも生きていく。生きていく、しかないだろ。

後藤、去る。
取り残される坂本。

坂本　アサンケアザードカヨ……。

風の音。
森の中。
男がやってくる。

男　Hi.
坂本　……。
男　I、ll go.
坂本　Go?
男　I、m released.
坂本　You released?
男　I、m happy.
坂本　Good. 良かった。娘さんに会える！ 娘さんに会える！ You can see your daughter. Good...
男　Don、t worry.
坂本　……。
男　Smile. Make yourself happy.
坂本　……。
男　Grandmother.
坂本　え？
男　（ぎこちなく手を組んで）Pray to your grandmother.
坂本　……。

ふたり、握手する。男の手が震えている。

男　メエー。
坂本　メエー。
男　Ｇｏｏｄ.

男、歩き出す。

男　Ｓｍｉｌｅ.
坂本　（笑ってみようとするけれどできない）
男　Ｓｍｉｌｅ.

男、去る。
編集部。飯倉がいる。

飯倉　坂本ちゃん、善利の家、わかった？
坂本　あ、はい。
飯倉　じゃ、田辺と一緒に今夜から張り込んで。
坂本　わかりました。

坂本、カメラバッグを持って行こうとする。

飯倉　あ、坂本ちゃん。
坂本　はい。
飯倉　（封筒を見せて）これ、次号で行くから。
坂本　これ？
飯倉　林田ミキのパンチラ。
坂本　どうして、
飯倉　え？
坂本　どこにあったんですか、それ。
飯倉　俺のデスクの上にあったぞ。
坂本　……。
飯倉　なんで早く出さないんだよ。よく撮れてるよ。カラーで行くから。
坂本　入稿！
飯倉　は？
坂本　もう入稿したんですか！
飯倉　いや、これから。
坂本　出さないで下さい！
飯倉　は？

坂本　出さないで下さい。
飯倉　何言ってんだよ。
坂本　その写真は出しちゃいけないんです。
飯倉　何言ってんだよ。
坂本　お願いします！
飯倉　わけわかんねえ。

飯倉、封筒を持って行こうとする。

坂本　待って下さい！
飯倉　なんだよ！
坂本　それを出したらダメなんです。
飯倉　何がダメなんだよ。

飯倉、再び行こうとする。

坂本　人生が！
飯倉　は？
坂本　人生が変わってしまうんです！
飯倉　はあ？
坂本　その写真はひと一人の人生を変えてしまうんです。だからダメです！
飯倉　人生って誰のだよ。
坂本　林田ミキの人生ですよ！

間。

飯倉　あのさあ、何言ってんの？
坂本　オリンピック前の大事な時期なんです。その写真が出たら、彼女はショックを受けます。もし精神的に不安定になったらどうすればいいんですか。それで結果出せなかったらどうすればいんですか。オリンピックなんて何度も出られるもんじゃないんですよ。もしそんなことになったら彼女の人生めちゃくちゃじゃないですか。
飯倉　で？
坂本　で？
飯倉　そんなのどうなるかわかんねーだろ。もしもの話してんじゃねーよ。
坂本　そのもしもが大事なんじゃないですか。
飯倉　は？

坂本　もしもこの写真を出したらって、想像することが大事なんじゃないですか。
飯倉　……。
坂本　そうじゃないですか。
飯倉　じゃあ、おまえはなんでこの写真撮ったんだよ。
坂本　……。
飯倉　撮っておいて出すなってなんだよ。おまえどういうつもりなんだよ。
坂本　わかりません。
飯倉　わかりません？
坂本　わかりません。
飯倉　（封筒で坂本を力いっぱいはたく）あのさあ、俺も暇じゃないのよ。
坂本　すみません。
飯倉　お前の写真が載るんだ。いいだろ。
坂本　だから、ダメです。
飯倉　なんなんだよ！　もうその写真はここにあるんだよ。載せないっていう選択はねーんだよ。
坂本　でも、ダメなんです。出さないでください。お願いします！
飯倉　うぜえな。

飯倉、去ろうとする。
坂本、土下座する。

坂本　お願いします！
飯倉　やめろよ。
坂本　お願いします！
飯倉　……。
坂本　確かに俺はその写真撮りました。そりゃ目の前にパンツがあったら撮りますよ。でも、現像してあまりにもよく撮れてたその写真見たら、なんか違うって思ったんです。
飯倉　……。
坂本　何が違うのかわからないけど、なんか違うって思ったから出さないでいました。
飯倉　でも、出したんだろ。
坂本　違います。誰かが勝手に……。
飯倉　は？
坂本　誰かが勝手に出したんです。
飯倉　――おまえが出してないとしたら、まずます問題なんだよ。おまえ、撮れてる写真出さないってことの意味わかってんのか。
坂本　……。

飯倉　なあ！
坂本　わかってます……。
飯倉　……。
坂本　やめます。
飯倉　……。
坂本　やめます。

間。

飯倉　わかった。
坂本　じゃあ。
飯倉　だけど、この写真は載せる。
坂本　え。
飯倉　いいだろ、これくらい。
坂本　いや。
飯倉　時間ねーんだよ。

坂本、立ち上がり、飯倉に殴り掛かる。

飯倉　なんだよ！

飯倉、坂本を倒す。

飯倉　俺はおまえみたいな奴が一番嫌いだよ。
坂本　……。
飯倉　えらいよなあ。
坂本　……。
飯倉　なあ、おまえから見て、俺たちは異常か？
坂本　……。
飯倉　俺から見るとおまえが異常に見えるけどな。
坂本　……。
飯倉　……。

飯倉、封筒を捨てる。

坂本　……。
飯倉　こんなチンケな写真で、刺されたらたまんねーからな。

坂本　……。
飯倉　行けよ。
坂本　……。
飯倉　やめる人間には1ミリも用はねーんだよ。
坂本　……。

飯倉、去る。
坂本、封筒をつかむとよろよろと立ち上がる。
駅のホーム。
電車の発車メロディー。
ぼんやりと電車を見送る坂本。
川瀬が電話で話しながらやってくる。

川瀬　……はい……はい……今晩中には必ずお送りします。すみません……はい……。

川瀬、電話を切る。
ふと、坂本に気がつく。
坂本は気がついていない。
しばらく見ている川瀬。
やがて、坂本に近づき、横に並んで立つ。

川瀬　もしかして飛び込むつもりですか。
坂本　……。
川瀬　押しましょうか。

沈黙。

川瀬　週刊現代やめたって聞きました。
坂本　……。
川瀬　私もライターやめよーかな。
坂本　……。
川瀬　すみません。私が写真出したからですよね。
坂本　……。
川瀬　坂本さん見てるとイライラしてたまんなかったんですよね。自分見てるみたいで。
坂本　……。
川瀬　ごちゃごちゃ言い訳してないで、自分の心に従って生きろよーって。

坂本　……。
川瀬　それってマジ難しいんですけどね。
坂本　兵士がいたんだ。
川瀬　は？　へいし？
坂本　パキスタンでつかまってたとき、ほかにもたくさん誘拐されてた人がいたんだけど、その中にパキスタン軍の兵士がいたんだ。
川瀬　はあ。
坂本　４０代くらいかな。小さな娘がいる人でさ。僕たちが暗い顔してると、いつも「メイクユアセルフハッピー」って言って、励ましてくれた。
川瀬　そうだったんですか。
坂本　ある日、その人が言ったんだ。「アイムリリースド。アイムハッピー」って。
川瀬　はい。
坂本　俺は解放される。俺は幸せだ。そう言って、笑いながら連れて行かれた。
川瀬　よかったですね。
坂本　殺されたんだよ。
川瀬　え……。
坂本　兵士を連れて行ったのは、強盗団の新入りの少年で、まだほんとに子どもで、いつも冗談ばっか言ってた。でも、一晩経って戻って来たときには、すっかり顔が変わってた。
川瀬　……。
坂本　軍の人間だから、そのまま解放するわけにはいかなかったんだと思う。そして、兵士自身そのことを知っていた。
川瀬　……。
坂本　それなのに、言い続けたんだ。異国から来て誘拐されて不安で押しつぶされそうな若者に、「メイクユアセルフハッピー」って、笑いながら言い続けたんだ。それが、どういうことなのか、僕にはまだわからない。
川瀬　……。
坂本　僕はたぶんあの森から出るときに、出口を間違えたんだと思う。
川瀬　……パキスタンに行かなきゃよかった？
坂本　いや。
川瀬　いや？
坂本　行ってよかった。
川瀬　え……。
坂本　今でも誘拐されるまでの2週間の旅を思い出すんだ。夜、カヌーの中でシュラフにくるまって寝てると、川の流れでカヌーがくるくるまわって、星空も回転するんだ。川の水面からはときどき河イルカがヌッと現れてかわいかったし、川沿いの村で村人が出してくれたチャイは本当においしかった。あとは一面、水と砂と

太陽だけ。そんな世界。あんな景色、あれから一度も見てない。でも、あのとき、僕は確かにそれを見たんだ。それはあそこに行かなければ見れなかった。

沈黙。

川瀬　それ、何かに書いたらいいのに。
坂本　え。
川瀬　そんな風景、ひとりじめしてるのもったいないですよ。
坂本　うん。でも、僕はいい。
川瀬　そうですか。
坂本　うん。
川瀬　これからどうするんですか。
坂本　（首を振る）何も、決めてない。
川瀬　そっか。
坂本　でも。――もうパンチラは撮らないと思う。
川瀬　何言ってるんすか。だいたい現代やめてから撮ったらただの犯罪ですからね。
坂本　（聞いていない）うん、撮らない。
川瀬　だから、それは当たり前、
坂本　もう、誰も殺さない。
川瀬　……。
坂本　それだけは決めてる。
川瀬　……。
坂本　何かをする、じゃなくて、しないって選択は駄目かな。
川瀬　さあ……。でも、もし、また撮りたくなったらどうするんですか。週刊誌の味を覚えたらやめられないんじゃないですか。
坂本　そのときは、カメラを置く。写真をやめる。
川瀬　……。そっかあ……。すごいなあ。うーん……。でも、なんかもったいなくないですか。本当にそれでいいですか。
坂本　いいんだ。僕はそれで幸せだよ。
川瀬　やめてくださいよ。それ、死ぬ人の台詞ですよ。
坂本　そうだね。
川瀬　強がんないでください。
坂本　――うん。

電車が轟音とともに滑り込んで来る。

川瀬　急行で、大丈夫ですか。

坂本　いや……。

川瀬　じゃ、また。また？

坂本　（笑う）。

川瀬、電車に乗る。

発車ベル。

川瀬　（振り返って）でも、本当にそうできたらいいですね。

坂本　え？

川瀬　誰も殺さない。

発車ベル、終わる。

坂本　うん。

暗転。

終わり